

## 物部公と物部臣 ―長野角屋敷遺跡出土木簡をめぐって―

亀 井 輝 一 郎

社会科教育講座

(平成十九年十月一日受理)

### (一)

一九九六年十二月から翌年一月にかけて発掘調査が実施された北九州市の長野角屋敷遺跡<sup>①</sup>(北九州市小倉南区大字長野)の包含層からは、縄文時代早期～平安時代初期頃の遺物が出土した。また、旧河道からは弥生時代前期～奈良時代の遺物を含む礫層数条が検出されたが、木簡はその旧河道下の灰色砂礫層上面にはりついた状態で裏面を上、流路の流水と並行するようにして出土した。この長野角屋敷遺跡出土木簡は、文字史料の少ない豊前国企救郡について纏まった情報を提供した点で貴重である。

出土木簡は写真のように下半部が失われていて完形品ではないが、現存部は幅八三㎢、長三六四㎢で、推定では八百㎢を超える大型のものである。上端はやや尖った半円形をしているが、中央部の二つに折損している部分には刃物痕の存在が指摘されている。木簡の年代について調査担当者は、出土遺物から奈良時代末期(八世紀末)～平安時代初期(九

世紀初頃)と推定している。

小稿ではこの木簡にみえる大領物部氏をめぐって、幾許かの整理を試みることにしたい。

### (二)

この木簡の釈読については必ずしも確定しているとはいえないが、報告書では以下のような釈文<sup>②</sup>が記されている。

(表) 郡召税長膳臣澄信 右為勘

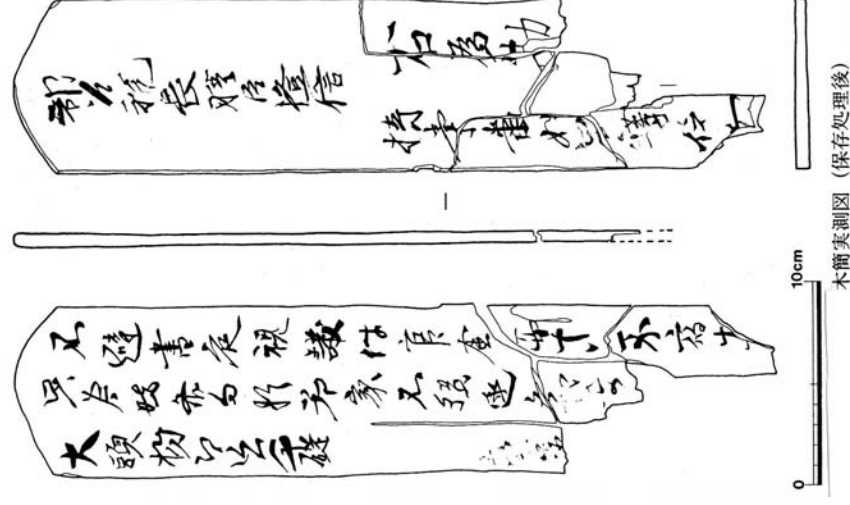
持事番姓□等依ヶ

(裏) 不避晝夜視護仕官舎而十日不宿直

只今曉参向於郡家不得延怠□□

大領物部臣今繼 □□□

この釈読で小稿で問題としたいのは、大領物部氏の姓(カバネ)についてである。報告書では姓に「臣」と「公」の二つの釈読があるが「公



とするには縦棒状に墨痕が明確に遺存しており臣と読んでおきたい<sup>③</sup>として、公説を退けている。また、名については自署の可能性を指摘し、「今継」と「多継」の二つの訓みがあるとしながら前者を採用しているが、特に説明はなされていない。

筆者も実見する機会<sup>④</sup>を与えられたが、名は今継で不都合はないと思われるが、姓については縦棒状の墨痕は短く、臣の一画とするのには問題が残るように思われた。縦棒はむしろ公の第一画とみることにもできるようで、全体的な感じからは公の概然性が高いように思われる(写真及び木簡実測図参照)。こうした問題は木簡の釈読についてしばしば生じることで、まして釈読に習熟しない筆者にとって一層困難なことではあるが、「物部公今継」と一先ず釈読しておきたい。

ところで木簡の記す内容であるが、大領の表記以外の文字も必ずしも確定的とはいいがたく、従って文意も十分には明らかではないが、郡が税長の膳臣澄信を何らかの不祥事に関して喚問するために遅延することなく郡家に出頭することを命じたものとみて大過ないと思われる。このように理解してよいとすれば、この文書様木簡は召喚文書であり、郡が税長を召す、いわゆる「召文」<sup>⑤</sup>木簡である。郡が発給したところからは一種の「郡符」<sup>⑥</sup>木簡といってよい。

こうした官人の召喚にともなう文書の発給手続きについては、紙の召文が本来の法源であり出頭等の最終確認上からも重要な意味をもっているが、木簡は破損しにくく持ち運びに便利なことから、官人への伝達は木簡によって行われたと推定<sup>⑦</sup>されている。この木簡が人為的に破損されているところから、その用を終えて廃棄されたのであり、廃棄場所＝本遺跡は、①発給元＝郡衙か、②伝達先＝郡衙関連施設の正倉の税長の元かのいずれかと考えるのが妥当であろう。

税長は郡司の下で正倉の管理に当たり、正税出挙の出納・保管を主要な任務としたといわれている<sup>(8)</sup>。正倉はもとは郡毎に一処に設けられたが、延暦十四（七九五）年には郷毎にも一院を置くこととされ、その直後には相接する郷はその中央に一院を置くこととされた<sup>(9)</sup>。推定されるこの木簡の時期の正倉の所在は不明としなければならないが、この長野角屋敷遺跡の周辺の遺跡からは、硯・筆・輸入陶磁器などが出土し、長野 A 遺跡からは「企救一」「吉備」などの、寺田遺跡からは「企貳」などの墨書須恵器が出土し、官衙の様相をみせている。こうした点を勘案すると、長野角屋敷遺跡がその範囲に含まれる豊前国企救郡長野郷に企救郡の郡衙が置かれていたことが想定されよう<sup>(10)</sup>。正倉が郡毎に設置された場合はもとより、郷毎に置かれるようになったとしても、長野郷の場合は郡衙に近いところに設置されていたと考えられ、この木簡の廃棄場所が企救郡の郡衙であった可能性は相対的に高いといえるのではなかろうか。

### (三)

この木簡は郡が発給したものであり、発給主体は「大領物部公今継」である。大領は郡の長官であることはいうまでもなく、その郡が豊前国企救郡であることもまず間違いないところと思われる。その大領の氏族名が物部であることも木簡の釈読からして異論のないところであろう。従ってこの物部氏をこの地方の郡領クラスの有力な地方豪族と考えて大過ないところである。

物部氏といえは一般的には連（むらじ）姓の物部連を指すように、饒速日命の後裔の神別氏族で物部を管掌する中央伴造の連姓の物部氏を中心とした「物部乃八十伴雄」とも称される氏族集団を構成し、その本宗家は朝廷で「大連」<sup>(11)</sup>の地位を占めたと伝えられている。物部氏の歴史は、

用明天皇没後の丁未（五八七）年七月に大連物部守屋が蘇我馬子らによって滅ぼされた本宗家（大連家）滅亡を画期に、鹿火・尾輿や守屋らの活躍した前期とそれ以後の大きくは前後二期に区分できる。

連系の有力な豪族で王権の軍事面を担った大伴連は欽明朝に金村の任那四県割讓問題を契機に失脚するが、物部連・蘇我臣のような本宗家滅亡といった氏族の歴史はない。また、神祇祭祀面を担った中臣連は阿氏に比べて相対的に新しい氏族と考えられるが、阿氏にみられるような歴史は知られない。こうした本宗家滅亡という歴史は連系氏族のなかでは物部氏の特徴の一つということができ、その後の氏族の展開にも影響を与えたのである。

前期物部氏は大伴氏とは性格を異にす呪的な性格を有する軍事・警察的氏族として王権との関係を密にし、その延長上に王権の命により石上神宮ニフツノミタマの祭祀<sup>(12)</sup>に与ったのである。

後期は七世紀代を中心とする律令制の成立期と八世紀以降の律令制の時代にわたるが、前者の七世紀代は物部系氏族の雌伏再編期に当り、八世紀以降の後者の時期は石上朝臣を「再生」物部氏の中心にした新たな物部氏集団の時期といえることができる。後期には前期の大連時代のようない目立った軍事的活動はなく、政治的活動も推古朝に物部依網連がみえるが、史上に再び活躍の姿をみせるのは主として孝徳朝頃からである。孝徳朝には物部朴井連、物部二田造らが知られるが、なかでも大化の東国国司の介を勤めた朴（榎）井連や、天武天皇の舎人として壬申の乱に活躍し、天武五（六七六）年に没したときに氏上を贈られた朴井（物部）連雄君らの活躍が著名である。雄君の功績は大宝元（七〇一）年七月に中功とされた。さらに榎井連は令制下の正月元日の儀礼で宮城門に、大嘗祭では太嘗宮の門に神盾鉾を立てることを石上朝臣と並んで執り行

うことが慣例となったことは、律令制下の物部系氏族の中で一定の地位を占めていたことを示している。

しかしながら守屋以後の物部系集団の中核を占めたのは、雄略朝の大連物部目の後裔の難波朝衛部大華上の子麻乃(子)とその子物部麻呂の系統であった(『統紀』養老元年三月条)。特に麻呂は壬申の乱では近江方において大友皇子の最後を看取ったが、天武朝以降は順調に朝廷で昇進し、遣新羅大使や筑紫総領、大宰帥、中納言、大納言、右大臣を経て、左大臣正二位で養老元年に没した。この間、天武朝の八色の姓では朝臣の姓を与えられ、その後には石上朝臣に改めたのである。このように麻呂こそは物部氏中興の祖といってよい。氏名の石上は令制以前の物部連がその祭祀に与った石上神宮に関わる地名であり、それを氏の名としたのである。また石上朝臣は榎井連と共に元日や大嘗祭で宮門に神榎鉾を立てることを担ったが、それに関与する両氏の氏人の人数は奈良時代には三人対一人の割合で石上氏が主導した。これらの儀礼は律令制以前の時代の服属儀礼が律令制の成立過程において再編されたものであり、律令制下の石上朝臣の「氏族としての新たな職掌<sup>(14)</sup>」といってよく、このことは前期物部氏の分掌した祭祀や呪力、軍事・警察力の一端を窺わしめるものである。こうした後期物部氏＝再生物部氏は前期物部氏の大連家とは、おそらくは別系統の家筋であったと考えるのが順当であろう。

後期物部氏は石上朝臣に代表される律令官人へと変身を遂げた。とりわけ石上朝臣麻呂は持統三(六八九)年九月に石川朝臣蟲名と共に位記を筑紫に給送するとともに新城を監し、文武四(七〇〇)年十月には筑紫総領に任じられ、大宝律令公布後の大宝二年八月には令制大宰府の帥に任じられているように九州との深い関わりが窺われる。このことは後述するような前期物部氏のもった九州との関わりの歴史と無縁ではなか

ったとしても、麻呂の動向が石上＝物部系氏族の九州地方への新たな展開の契機となったとは認めがたく、後期においては物部系氏族が九州地方に勢力を拡大し浸透していく状況は低いというべきであろう。

#### (四)

物部系氏族集団の特色の一つは、『新撰姓氏録<sup>(15)</sup>』では神別天神系二六五氏中一〇六氏を占め、「物部乃八十伴雄」とも称されるように擬制関係も含めた同族集団の大きさにある。その原因の一半は後期物部氏の初期に名のみえた物部依網連や物部朴井連、物部二田造などのような「複姓氏族」の存在が与っていたのである。複姓には物部が、物部朴井連のように上にくる第一種と阿刀物部のように下にくる第二種の二種類がある。一般に前者は伴造系に多いが、大化前代に存在が明らかなものは少ないといわれ、後者には官職に関係した名称が多く、その起源は大化前代に遡るらしいことなどが指摘<sup>(16)</sup>されている。物部系については他氏に比べて、第一種・第二種の両者がそれぞれ相当数存在しているという特色がある。物部系の第二種はほとんどが姓(カバネ)をもたず、物部連の支配下にあった部民またはその後裔と考えられるものが多く、それ故、伴造または豪族としての物部氏については第一種を主とすると考えてよいのではない<sup>(17)</sup>か、といわれる。

物部系の第二種の上半の称については、『日本書紀<sup>(18)</sup>』に来目・竹斯・(筑紫)間、『続日本紀』に殖栗・贄田、『三代実録』に阿刀、『姓氏録』に坂戸・相槻・二田(いずれも未定雑姓)などがみられるが、さらに『先代旧事本紀<sup>(19)</sup>』天神本紀に記されている天降供奉した「天物部二十五部<sup>(20)</sup>」は全て第二種の複姓氏族と伝えられている。これらの称は全て地名であり、朝廷での官職名に因むものとは考えられない。このように物部



系の第二種の上半の称には地名に因むものが多い。その多くは畿内の地名に比定できるが、それ以外では赤間・竹斯・（筑紫）間・（筑紫）贄田・二田など九州が多いのは、一つの特徴といってよい。恐らくは大化前代のある時期に物部連の展開＝ヤマト王権の版図拡大にともない、各地に設置された物部が含まれていると考えてよいであろう。

物部二田造と二田物部の存在は、こうした複姓氏族の間でもトモ（伴）―ベ（部）の関係があったことの微証とみることもできるかと思われる。物部系氏族集団の中央伴造が物部連であり、その下にいわば中間管理＝現地管理のトモが存在していたと理解することができる。そうしたトモで物部を冠する氏族の姓には連以外の首・直・造・君・臣・宿禰<sup>(21)</sup>が知られ、単姓氏族が多いといえよう。

これらの姓をもつ氏族と物部連氏とは、王権のもとで職掌を通じての擬制的同族関係を有するものが多かったと思われる。例えば、物部首については、『書紀』垂仁三十九年十月条の石上神宮の祭祀起源説話<sup>(22)</sup>にみられるように、同条の「二云」には「春日臣族、名市河令治、因以命市河令治、是今物部首之始祖也」とあり、『姓氏録』（大和国皇別）の布留宿禰条からも元来はワニ（春日）系の氏族であったが、物部連氏が王権の命により王権に奉仕する職掌の一つとして石上神宮（ツノミタマ）の祭祀に関わるようになり、その支配下に置かれるようになって物部を冠するようになったことが知られるのである。

これらの姓をもつ氏族の多くはヤマト王権による全国統一過程における物部の設置に伴い、現地管理氏族として物部連の管掌下に置かれた歴史を有するものと考えて大過あるまい。史料的には後期物部氏の時代に属するものが大半であるが、奈良時代末以降に多くみられる改氏姓によるものなどの外は、比較的早い段階の在り方を伝えていると考えてよい

であろう。

## (五)

ところで長野角屋敷遺跡出土木簡の大領物部の姓（カバネ）を「公」または「臣」とする説のあることは既述の通りであるが、物部系氏族の姓について「公」は次節で触れることとし、本節では「臣」について整理しておきたい。

物部を冠する物部系氏族で姓「臣」を有する氏の存在を伝える史料は極めて少なく、『出雲国風土記』や『陸奥国風土記逸文』などはその数少ない史料の一つである。

『出雲国風土記』には楯縫郡の郡司一覧中に「郡司 主帳无位物部臣 大領外従七位下勳十二等出雲臣 少領外正六位下勳十二等高善史」と物部臣がみえている。楯縫郡は風土記の郷数を『養老戸令』定郡条に検すれば下郡であり、その郡司は同じく『養老職員令』によれば大・少領および主帳各一人であって、風土記記載の郡司と一致する<sup>(23)</sup>。また人名は全て欠名であるが、大領出雲臣は同郡の記載中に大領出雲秦太田とみえる人物とみて誤りはないであろう。また高善史は他にみえない氏姓であるが、『統紀』天平神護二（七六六）年四月条に諸陵寮の冤枉よって陵戸とされた大和国人高善毗登久美咩らが陵戸籍から除かれたという記事があるが、この高善毗登は宝亀元（七七〇）年九月条の姓毗登を本字の首あるいは史に戻せとの令旨によれば、高善史であった可能性はあるであろう。このようにみてくると楯縫郡の郡司についての記載に一定の信憑性は認められるというべきであり、物部臣も欠名ではあるがその存在は確認してよい。

楯縫郡ではないが、天平十一（七三九）年の「出雲国大税賑給歴名帳<sup>(24)</sup>

」の残存部分の出雲郡や神門郡に戸主・戸口として物部の存在が知られ、前者の漆沼郷深江里には戸主物部首百枝・戸口物部首牛女の如く物部首姓が見える。さすれば出雲における物部の「秩序」に物部臣―物部首―物部という構成を考えることもできるかと思われる。

出雲と物部氏の関わりは『書紀』崇神六十年七月条の矢田部造遠祖武諸隅による「出雲神宝」献上をめぐる説話と垂仁二十六年八月条の物部十千根大連による神宝検校の説話などから窺えるように、神宝を媒介とした出雲服属に関わる所伝にみることができる<sup>(8)</sup>。ただ、出雲国には物部郷（『和名抄』）も物部神社（『延喜式』神名帳）も認められないことなどを勘案した時、この物部臣が出雲臣の一族、即ち本姓が出雲臣であった可能性は十分にあるように思われる。その点では出雲の物部臣の存在と分布は限定的であったといえるのではなからうか<sup>(9)</sup>。

次に『陸奥国風土記逸文』の白川郡飯豊山条には「又、飯豊青尊、物部臣をして、御幣を奉らしめたまひき。故、山の名と為す」として飯豊山の地名起原の一つの説話を載せている。ここにみえる飯豊青尊は『記・紀』の履中天皇の皇女を指していると思われるが、それが付会の説であることは明らかであろう。同逸文には飯豊山のいま一つの地名起源説話に「此の山は、豊岡姫命の忌庭なり」という伝えがあり、また古老の言として「垂仁二十七年の秋の飢饉で人民が多く亡くなった。それで宇恵々山といったが、後に豊田また飯豊と改めた」としている。そこには飯豊を文字通り「飯（稲・米）が豊か<sup>(3)</sup>」と解していると考えられ、「ミケツ神」に通じる性格が窺われるのである。陸奥国には飯豊を冠する飯豊郷<sup>(31)</sup>が『和名抄』の宇多郡に、飯豊比賣神社（白河郡）・飯豊神社（加美郡）・飯豊和氣神社（安積郡）が『延喜式』（巻十、神祇下）の神名帳にみられる。なかでも飯豊比賣は一見すると履中皇女の飯豊皇女に関係

するようにも思われるが、これらの飯豊は前述のごとくミケツ神に関係する名辞と考えるのが妥当と思われる。『記・紀』等の飯豊皇女をめぐる所伝に物部連ら物部氏との関係を示唆するものはなく、逸文の物部臣と繋がる飯豊青尊の存在は確認できないのである。

ところが九世紀代になると陸奥国と関わって、『統日本後紀』以下の正史に物部斯波連などの物部系氏族が現れてくる<sup>(35)</sup>。承和二（八三五）年二月に俘囚の勳五等吉弥侯宇加奴ら三人にこの氏姓が賜与されており、元慶五（八八一）年五月には陸奥蝦夷訳語外従八位下の永野に外従五位下が与えられている。また、承和七（八四〇）年三月には宮城郡権大領外従六位上勳七等物部已波美が私稲を以って私池を造り公田を灌漑したことを褒めて外従五位下を仮授されている。前者は明らかに蝦夷系であり、後者は郡司級の有力者であるが姓を有しておらず、勳位などから蝦夷系であることを必ずしも排除できないように思われる。そういう意味ではこれらの物部が果たして当時の石上朝臣らの統括を受けた存在かどうかは極めて疑問であり、むしろ嘗ての前期物部連らが有していた「呪的」戦士としての物部の、対蝦夷政策上の願望的かつ擬似的な賜姓というべきではなからうか。こうしたことが『陸奥国風土記逸文』の物部臣の登場の背景に考えられるとすれば、『出雲風土記』の物部臣とは異なり、実在しない架空の人物である可能性があるように考えられる。

御幣<sup>(36)</sup>を媒介とするという点では、むしろ神祇関係の中臣氏の方が相応しいとさえいえそうである。貞観八（八六六）年正月二十日付太政官符<sup>(37)</sup>の興味ある記事からは、中臣連と関係深い常陸の鹿嶋神宮が陸奥とも特別な関係にあったことが窺える。鹿嶋の大神の苗裔神三十八社が所在する十三郡には飯豊系神社が存在していないことは偶然かも知れないが、中臣氏ではなく物部臣が登場する一因であったといえるかもしれない。

最後にいま一つ触れておきたいのは『書紀』皇極二（六四三）年十月壬子条<sup>(8)</sup>の記事である。同条には「蘇我大臣蝦夷、縁<sup>レ</sup>病不<sup>レ</sup>朝。私授<sup>二</sup>紫冠<sup>一</sup>於<sup>二</sup>子入鹿<sup>一</sup>、擬<sup>二</sup>大臣位<sup>一</sup>。復呼<sup>二</sup>其弟<sup>一</sup>、曰<sup>二</sup>物部大臣<sup>一</sup>。々々之祖母、物部弓削大連之妹。故因<sup>二</sup>母財<sup>一</sup>、取<sup>二</sup>威於世<sup>一</sup>」とある。この記事を読めば、大臣位に擬せられた蘇我入鹿の弟を復た物部大臣と呼んだのであり、「復」は物部大臣の大臣に係ると解すべきであろう。そして入鹿と弟の祖母は蘇我馬子の妻Ⅱ物部弓削大連（守屋）の妹であって、物部本宗家滅亡によりその財の多くは蘇我氏的手中に帰し、それも相俟って蘇我氏は「威を世に取る」ことになった、<sup>(8)</sup>というのである。この物部大臣の物部は蘇我氏の中で物部の財の管掌に与っていたことからの名称であり、本姓はいうまでもなく蘇我臣で、元来は物部臣と呼ばれていたのであろう。

以上みてきたところからすれば、類例は極めて乏しいが、物部臣は物部連や石上朝臣とは血縁的關係をもたない存在で、「臣」系豪族が称した氏姓であったと考えられる。

## (六)

次に本節では君姓の物部氏についてみることにしたい。

姓キミの表記は、天平宝字三（七五九）年十月八日に「天下諸姓着<sup>二</sup>君字<sup>一</sup>者、換以<sup>二</sup>公字<sup>一</sup>、伊美吉以<sup>二</sup>忌寸<sup>一</sup>」（『統紀』）というように君から公に改められることとなった<sup>(9)</sup>。姓キミの起源は豪族首長の尊称にあったと思われるが、それがやがて姓（カバネ）となったのである。姓キミは天武朝の「八色の姓」で真人を与えられた継体天皇の系譜につながる守山公ら十三氏は公、朝臣が与えられた大三輪君ら十二氏は君というように、同音キミの表記は明確に区別されたのである。このとき朝臣の

賜姓に与らなかった君姓氏族は、以後も君を使用した。天武朝以後、このように公と君は区別して使用されたが、天平宝字三年に至りその区別は失われることとなった。君姓の氏族には、大三輪君のような畿内中央豪族や犬上君のような畿内周辺の中小豪族の他に、筑紫君・肥君・大分君・胸方君や上毛野君・下毛野君らの地方豪族がいたが、これら地方豪族は北部九州や関東に比較的多いことが知られるのである。

さて、長野角屋敷遺跡出土木簡の大領物部氏の姓（カバネ）は「公」ではないかとするのが本稿の立場である。上述したように天武朝以降は公と君が区別され、その君に公の字を当てるようになったのが天平宝字三年十月以後であるとすれば、この木簡の推定年代が八世紀末から九世紀初頃であることからして、木簡の「公」表記には年代的な矛盾はなく、また本来の姓が君であったことも間違いないところであろう。

九州以外で物部系の君姓氏族が知られるのは、わずかに東国の上野国である。群馬県高崎市山名町字金井沢に現存する神亀三（七二六）年丙寅二月二九日の日付をもつ「金井沢碑」（高田里結知識碑などともいわれている）である。この碑は神亀三年二月をあまり降らぬ時期に建てられ、自然石使用や形態などの特色からは朝鮮碑を源流とし、渡来人、とりわけ新羅人との関係などが窺える、といわれている<sup>(1)</sup>。碑文の釈読については異説がない訳ではないが、<sup>(2)</sup>内容は三家子孫を願主に七世父母らを供養する為の願文であり、願主グループと知識結人グループの歴名がみられる。その願主グループには他田君目頼刀自と某との間に生まれた子の加那刀自、さらに加那刀自が物部君某との間に儲けた孫の物部君牟足・瓢刀自・乙瓢刀自の名が記されている。毛野（上野・下野国）地方はヤマト王権の東国支配の重要な拠点でもあったが、願主の氏の名三家は屯倉経営に関与していたことによるものであり、その三家氏と婚姻を結ん

だ物部君も土着した在地の有力豪族と考えてよく、両者の存在は王権の東国支配の展開と関係するものと推考される。東国支配の拠点に配された「呪」的戦士＝物部を管するトモの物部君は、後述する中央派遣型トモであったのではなかろうか。

特に上野国は物部君との関係は深いようで、『統紀』天平神護元（七六五）年十一月条には上野国甘楽郡人の中衛物部蛭淵ら五人に姓物部公が、翌年五月条には同郡人外大初位下磯部牛麿ら四人にも姓物部公が賜与された記事がある。後者の磯部と同族と思われる磯マ身麻呂が、金井沢碑の知識結人グループに鍛師としてみえているのは注目される。

ところで北部九州を中心に物部の分布が広くみられることはよく知られているが、それを簡単に纏めたのが表1である。史料の残存状況にもよるが、物部郷や物部系神社の分布は物部系の一定の展開の結果と考えることができよう。人物については大宝二年の戸籍によって筑前と豊前にかかなりの人数が知られるが、豊前の物部首猪手賣（丁女・二十二歳・寄口）・物部首古志賣（秦部悪閑の妻・三十六歳・丁妻）の二人以外は全て姓を有していない。そこには物部首＝物部という関係の存在が類推されるが、物部首からすればより上位の存在を想定することも可能であろう。

天慶七（九四四）年四月注進の「筑後国神名帳」<sup>(43)</sup>の残存部分に物部系神社の分布が多くみられる。御井郡の物部名神、三潯郡の物部社二社と物部山国神、山門郡の磯上物部神・物部阿志賀野神・物部田中神三座である。筑後国、なかでも高良神社のある御井郡は『書紀』継体二十二年十一月条に記すように、「反乱」を起こした筑紫君磐井と討伐軍の大將軍物部連鹿鹿火が最後の決戦を行い、「遂に磐井を斬りて、果たして疆場を定め」たところであった。高良山にある高良神社は耳納山地の西端

に位置し「神籠石」で名高いが、筑後国府地域を含むこの辺りは要衝の地であった<sup>(44)</sup>。高良神社の起源については諸説<sup>(45)</sup>があり明確とはいいがたいが、そうしたなかで高良神社と物部との密接な関係が窺われる。

『高良山高隆寺縁起』<sup>(46)</sup>には高良神社の神職で有力な者、丹波・物部・安曇部・草部・百済を五姓氏人と称し、物部は大祝とされ、「或説」は百済に代わり前田をあげ、物部に注して「福貫藤大臣乳子 大祝嫡男 小祝次男」と記している。また、白鳳十三年癸酉二月八日のこととして国書生清原真人道理と視聽進署（署カ）に名神御厨預物部公岡麻呂・祝部物部公有意・勾当阿曇公吉祢麻呂・神部物部公常仁・弓削郷戸草部公がみえている。この日付けは大祝の祖である高良大名神宮神部物部道麻呂男子美乃里麻呂（七歳とする）が託宣を受けた日を指すのであろう<sup>(47)</sup>。このように高良神社の大祝は後には鏡山と名乗る物部の世襲するところであり、その姓については上記した物部公岡麻呂らの例からすれば「公」であったと考えるのが順当である。ただ、他の氏族の表記にも「公」の使用例がみられるなどの点からすると敬称としての使用も考慮しなければならないかも知れないが、その可能性は低いと思われる。

祝＝ハフリの起源は定かではないが、一般的には神憑かりをし託宣などを行っていた者を意味し、地方の首長的な者で神祭りを掌っていた者もそう呼ばれたと考えられ、遅くとも六・七世紀には地方のヤシロに斎っていた<sup>(48)</sup>、といわれる。高良神社の祝については斉衡三（八五六）年六月十九日付文書に「高良玉垂名神祝外少初位下物部大繼」とみえているが、これに先立って既に置かれていたことは間違いないと思われる。高良神社の高良玉垂命については諸説<sup>(49)</sup>多く定かとはいいがたいが、その地方の地方神であり、筑後国等における物部神社の存在からも物部氏の氏族神とは別神であると考えてよいであろう。肥前・筑後の堺に鹿猛神が



表1 九州の物部関係概略一覧

国名	郡名	郷名	神名	人名	出典・備考
豊前国	企救郡			(筑紫) 聞物部大斧手	日本書紀・雄略18年条
	仲津郡			物部首猪手賣	大宝2年丁里戸籍
	上三毛郡			物部首古志賣	大宝2年塔里戸籍
豊後国	直入郡		直入物部神		日本書紀・景行12年条
筑前国	嶋郡			物部麻呂ほか	大宝2年川辺里戸籍、計63名
筑後国	生葉郡	物部郷			和名抄
肥前国	三根郡	物部郷			和名抄・肥前国風土記
			物部経津主神	物部若宮部	肥前国風土記
日向国	那珂郡	物部郷			和名抄
壱岐国	石田郡	物部郷			和名抄
			物部布都神社		延喜式
				物部於伎	周防国正税帳、史生大初位上
				竹斯物部莫奇委沙奇	日本書紀・欽明15年条

表2 豊前国郡別郷数一覧

和名抄豊前国		
	郷数	等級
田河郡	4	下
企救郡	2	小
京都郡	4	下
仲津郡	8	中
築城郡	4	下
上毛郡	4	下
下毛郡	7	下
宇佐郡	10	中
計/平均	43	/ 5.375

表3 九州国別郡郷数比較一覧

	延喜民部式		和名抄		古律書残篇		
	等級	郡数	郷数	郡の平均郷数	郡数	里数	郡の平均郷数
筑前国	上	15	105	7			
筑後国	上	10	10	5.5	10	70	7
豊前国	上	8	8	43	8	50	6.25
豊後国	上	8	8	42	8	40	5
肥前国	上	11	11	45	12	70	5.83
肥後国	大	14	14	99	13	106	8.15
日向国	中	5	5	28	5	26	5.2
大隅国	中	8	8	38	5	19	3.8
薩摩国	中	13	13	35	13	25	1.92
壱岐国	下	2	2	13			
対馬嶋	下	2	2	9			
計・平均		96	96	512	74	406	5.48

居たので筑紫君と肥君らが古い、筑紫君等の祖麤依姫を祝として祭らせた、という所伝が『筑後国風土記逸文』にみられる。これらのことを勘案すると、要衝の地に位置する地方神高良玉垂命の祭祀に与っていた「祝」がその地方の首長的存在でもあったとすれば、五姓氏人の草部は水沼君の後裔<sup>⑩</sup>ともいわれ、このような水沼君や筑紫君の一族の者が祝であったことも推察されよう。その後、おそらくは筑紫君磐井の「反乱」を一大契機にヤマト王権の勢力が及ぶなかで、呪的戦士集団である物部が呪的軍勢力でもって拠点を押さえるようになったのではなかったろうか。磐井と物部連鹿火の最後の決戦が御井郡であったことは象徴的である。高良玉垂命の祭祀は、ちょうど石上神宮の祭祀を王権の命により物部連が在地の勢力ワニ（春日）氏を取り込んで物部連十物部首（春日臣＝布留宿禰）の関係を作り出して行つたのと同じように、一方で現地の祭祀者であった「祝」を現地管掌者として取り込んでいったのではなかったであろうか<sup>⑪</sup>。なお、この他に『書紀』景行紀にみえる物部君の祖夏花も君姓で九州に関係する人物であるが、次節で考えることとしたい。

これまで君姓の物部氏について概観してきたが、いずれもヤマト王権の支配の重要拠点にその存在がみられるといつてよい。王権の全国支配の過程で地方を直接掌握する手段に屯倉や部の設置があった。屯倉の管理は王権がヤマトから派遣する使者が現地豪族らを取り込みつつ行う直接的な形態が中核的であるが、その地の豪族に管理を委ねる間接的な形態もあったとすれば、部の設定・管理にもそうした二つの形態が想定されよう。物部についていえば、中央トモの物部連の下に置かれた地方的トモに物部連と血縁関係をもつ中央派遣のトモと、擬制的関係にとどまる地方豪族らの任じられるトモを想定することができるのではなかろうか。前者のトモの重要性は明らかであろう。

## (七)

ところで、物部氏と九州の関係について『記・紀』の語るところはそれ程多くはない。

『書紀』景行十二年九月条の「景行天皇九州巡幸説話」は、熊襲の不朝貢を契機とする「まつろわぬ者」に対する天皇自らの平定譚として著名である。『記』にはみられない『書紀』のみの説話である点からは、本来の「帝紀」や「旧辞」に載せられていたものとは思われない。仲哀天皇や日本武尊の熊襲征討説話と同類のヤマト王権の全国平定譚に類するもので、仲哀説話は神功皇后伝承と関わるが、後者の日本武尊の熊襲平定譚とは同工異曲である。主人公が皇子から天皇に、いわば「格上げ」された天皇顕彰の側面が強くなっているのであり、現行の景行天皇巡幸説話が纏められたのはそれ程古いことではないであろう。

その説話の最初に熊襲征討のため周防の娑婆に到った天皇は、南方に烟氣が多く立つのを見て賊の存在を疑い、多臣の祖武諸木・国前臣の祖菟名手と物部君の祖夏花を派遣した。その結果、帰順してきた神夏磯媛から齎された賊に関する情報によって武諸木らは賊を誅殺することがで、天皇は筑紫に行幸し、豊前国長峽縣に行宮を建て、その地を京と名付けたという。

天皇の九州巡幸の尖兵となった三人の内、多臣は神八井耳命を祖とする畿内豪族である。『記』神武段には命の後裔、即ち多臣の同族として十九氏を挙げるが、なかでも火君・大分君・阿蘇君・筑紫三家連らと同祖関係を主張するように、多臣と九州との繋がり of 強さが窺える。また、国前臣は『記』孝靈段に日子刺肩別命の後裔に高志之利波臣・五百原君・角鹿海直と並んで豊国<sup>⑫</sup>之国前臣とあり、豊後国国崎郡国前郷を本拠とする豪族であるが、この命の兄弟に（大）吉備津日子が伝えられているこ

ととあわせて、海との関連性が窺えるようで興味が引かれる。国前臣の祖菟名手は、『筑後国風土記』の豊国造縁起譚に景行朝に豊国直らの祖菟名手をして豊国を治めさせたとみえる菟名手と、また『旧事紀』（卷十）「国造本紀」に「豊国造 志賀高穴穗朝御代、伊碁国造同祖、宇那足尼定賜国造」とある宇那足尼とは同一人物と考えられ、国前臣と豊国直は同祖関係にあることになる。豊国造・豊国直の名は豊前・豊後に分割する以前の地域名を負っており、豊前国の南部には宇佐国造の存在が認められるが、北部には国造の存在を徴しえない。天平十二（七四〇）年九月に藤原広嗣与党の三田塩籠を殺した豊国秋山は豊前国百姓（『統紀』）とあることなどから、豊国造は分割後の豊前北部を基盤とした国造と考えられないこともない。しかし、豊国直や豊国一族のその活動は秋山らの極僅かな例以外は全く知られるところはなく、七世紀後半以降においても豊前国全域に居住して「国造」の伝統的勢力を及ぼしていたとは考えられない<sup>(8)</sup>。こう理解できるとすれば、企救郡地域を中心とする豊前国の北部の権力・在地状況については、「国造」の展開とは別の要因・背景を考慮しなければならないことになるであろう。

物部君については微すべき『記・紀』の記事は他にはないが、多臣が九州と深い関係をもち、国前臣は国東地方の豪族であるが、系譜的にはヤマトに繋がること、九州や東国などの地方豪族に多い君姓であることなどから、この物部君は畿内出身の地方豪族である蓋然性があるといえるのではなからうか<sup>(9)</sup>。物部公（君）今継について既述したことなどを勘案すると、郡司の消長はあるにしても、今継は系譜的に物部君夏花に繋がる可能性を認めてよいのではなからうか。君姓物部については、その出自・系譜は明かとはいえないが、彼ら物部君は磐井の「反乱」を契機に、後の企救郡地方を中心に配置された物部を管掌する畿内系の中央派

遺型トモであり、土着した氏族と考えられるのである。同様の状況は東国上野国の物部君にもあつたのではなからうか。

いま一つ物部氏と九州・王権の関係で重要な事件は、『書紀』継体二十一年六月条の筑紫君磐井の「反乱」<sup>(10)</sup>事件である。この「反乱」はヤマト王権による全国統一の最後の段階に位置付けられる事件であり、磐井を中核とする九州勢力の主体的な反ヤマト王権闘争でもなく、ましてや独立を指向したものでもない。ヤマト王権にとっては統一王権の樹立を目指し、これまでの九州勢力との関係をさらに押し進めて文字どおり支配・服属関係を実現し、畿内・九州と九州・中国・朝鮮との海上交通権とともに、対外的な「外交権」の一元的掌握を実現するものであつた<sup>(11)</sup>。

磐井の「反乱」の報に接したヤマト王権は大伴金村や物部麿鹿火・許勢男人らの合議に従い物部麿鹿火を将軍として派遣したと『書紀』は伝えるが、『古事記』（継体段）には物部荒甲大連と大伴金村連の二人を遣わしたとし、また『筑後国風土記逸文』は官軍とのみ記す。ところが周知のように『書紀』は麿鹿火の言葉として「在昔道臣、爰及室屋、助帝而罰」<sup>(12)</sup>と記しているが、道臣は神武天皇を助けた道臣命（大伴氏之遠祖日臣命が改名）であり、室屋は金村の祖父に当たる人物である。内容的にも大伴氏の功績を顕彰するものであつて、麿鹿火の言葉としてはふさわしいものではない。既述のような意味をもった磐井の「反乱」平定には、『記』の伝えるように物部連と大伴連という王権の二大軍事氏族が派遣されたと考えるのが順当であろう。とすれば、『書紀』はこの「反乱」から大伴氏の存在を抹消しようとしたが完全には抹消できず、あるいは不手際からか、大伴氏の痕跡を残すことになったということになる。このことは「反乱」以後の両氏の消長や編纂時期の状況が反映しているとも考えられるが、結果的には『書紀』では物部氏が強調されてい

るのである。軍事氏族である両氏の氏族の性格に相違があったことも関係しているかもしれない。このときの鹿鹿火らヤマト王権派遣軍の構成は直接的には知ることはできないが、同族や配下の物部を中核に地方豪族なども動員されたことであろう。この筑紫君磐井の「反乱」の平定を画期としてヤマト王権の全国平定は完成をみ、九州も王権の一元的支配下に組み込まれることとなった。その「戦後処理」と支配の強化は、それまでの点や線から面として内陸部にも及ぶこととなり、安閑二年五月とする筑紫の穂波・鎌屯倉、豊国の膝崎・桑原・肝等・大抜・我鹿屯倉、火国の春日部屯倉や宣化元年五月とする「那津官家」の設置<sup>⑧</sup>などは、その中核であった。これらの設置は磐井に代表された九州勢力を踏まえて軍事・政治・交通などの要衝を押さえるものであったが、ヤマト王権にとって畿内ヤマトと九州の連絡・交通の確保は、そのために至上の課題であったことはいうまでもない。そうした時、豊前・豊後の豊国は極めて重要な位置にあったのである。その一方で、九州の在地豪族をいかに支配統治するかもまた大きな課題であったが、滅亡を免れなお一定の勢力を有した筑紫君が国造に任じられたのはその対応の一環であった。

## (八)

物部連は前節でも触れたように、王権による「まつろわぬ」九州平定に重要な軍事的役割を果たした氏族として現われている。その軍事が「呪」的要素の濃いものであることはこれまでも述べてきたが、物部連のそうした軍事的役割を知る上で、『書紀』雄略十八年八月戊申条の伊勢の朝日郎討伐説話<sup>⑨</sup>は注目される。その概要は、物部菟代宿禰と物部目連による伊勢の朝日郎の討伐に動員された筑紫の聞物部大斧手は軍中で叫び、弓の名手朝日郎の強力な箭から楯でもって目連を守った。怖じ気づ

いて朝日郎を捕えることができなかった菟代宿禰に代って、目連が朝日郎を獲殺するのを助けた。怒った天皇は菟代宿禰の有する猪使部を奪い、目連に与えた、というものである。

この討伐譚は『書紀』にのみ記載された物部氏の祖先伝承に由来する説話的要素をもつたものと考えられる。そこには物部連目に率いられた筑紫の聞物部大斧手の名がみえているが、これは既に述べた第二種複姓で、聞は企救郡のキクである。このように企救郡地方に物部がいたことは明らかで、恐らくはヤマト王権の展開にともなって企救郡地方を中心に設定された物部が聞物部であったのであろう。この目連は物部連の系譜では重要な位置を占める人物<sup>⑩</sup>で、なかでも物部氏の中興の祖といつてよい石上朝臣麻呂の薨伝に「大臣、泊瀬朝倉朝廷大連物部目之後」（『統紀』養老元年二月癸卯条）と伝えるように、後期の再生物部氏にとって前期物部氏との接点に立つ人物として位置付けられている。

一方、菟代宿禰については他に知りうるところはない。朝日郎討伐に際して怖じ気づいて任を果たさず、そのため管掌していた猪使部を取り上げられて目連に与えられた人物として描かれている。この菟代には連ではなく敬称的な宿禰が付されており、さらに猪使部の問題は朝日郎説話にとつて必ずしも必須の要素ではなく、物部連目の猪使部管掌起源を説明する付加的要素といった側面がみられる。この説話は目連と聞物部大斧手の話として元々は伝えられていたところに、菟代宿禰と猪使部の話が付加されて纏められた可能性が考えられるのである。それはともあれ、九州の聞物部が伊勢の朝日郎討伐に動員され主要な役割を果たす人物として描かれていることは、聞物部の設置以来一定の時間が経過し、動員可能な状況が現地に形成されていたことを示唆するものである。

伊勢朝日郎討伐説話にみられる筑紫の聞物部大斧手の働きについて榎



村寛之氏<sup>(2)</sup>は、祭官戦士の大斧手が呪具の楯を執り、大声で「叱」という呪的行為で味方を励まし、二重の甲を射抜く魔（呪）力をもった朝日郎の弓矢をその楯でもって防いだことで、朝日郎は魔力を失って滅ぼされたと理解できるとし、楯と弓箭具に呪力を認める古代人の意識が反映している、と指摘されている。また、武器であるとともに悪しきものを防ぐ境界祭祀の呪具として古くから認識されていた楯は、推古朝に朝賀に用いられるようになったが、それに物部氏が関与するようになるのは孝徳朝と推測され、持統朝に至って即位儀礼と結び付くようになった、ともいわれる。まさに物部連に率いられた「呪」的戦士としての物部は、ヤマト王権の全国平定に尖兵として動員され、平定後の統治の一端を担うに相応しい集団であったのである。

物部・榎井両氏が朝賀や大嘗祭に際して楯鉾を立てることは既述のように奈良時代以降は慣例化するが、その起源が孝徳朝にあるとする榎村氏の指摘は、再生した後期物部氏が再び政界に姿を見せるのが孝徳朝であったことと符合する。勿論、呪的な性格を持った楯鉾との関係はこの時に始まったものではなく、大連時代の前期物部氏に遡ると思われるが、前期物部氏の氏族的性格の如何なる部分を再生物部氏がその拠り所としたかが推測される。大嘗祭は農耕儀礼の新嘗祭が即位儀礼の一環に組み込まれたものであり、律令制以前におけるニイナメ・ヲスクニ儀礼<sup>(3)</sup>が律令制的に再編されたものといつてよく、政治的には服属儀礼としての性格を持つものである。大嘗祭は天皇一代一度であるが、朝賀は毎年年頭に行われる正月行事であると同時に、臣下等に服従を求める服属確認の儀礼でもあった。新しい原理をもった律令制の下で整備されて行ったこのような新しい服属儀礼に再生物部氏は楯と鉾をもって参加することになったのであるが、このことは楯が境界祭祀の呪具でもあったとすれば

境界を越えて「まつろはぬ異郷のモノ」を服属させる前期物部氏の呪力との繋がりを示唆するものといわねばならない。

『書紀』垂仁八十七年二月条には物部氏が石上神宮の祭祀に与る由来を説明した十干根大連にまつわる奉祀起源説話が伝えられているが、石上神宮にはツツノミタマ以下の宝剣類が納められていたのである。これらの刀剣は文字通りの武器としての機能にもまして宝剣としての機能をもったものであり、服属の証として神宮に納められたものであった。壬申の乱の余韻さめやらない天武三（六七四）年八月に天皇は忍壁皇子を神宮に派遣して膏油でもって神宝を磨かせ、その日に詔して「元来諸家の、神府に貯める宝物、今皆其の子孫に還せ」と命じたのであった。神府に貯める宝物とは刀剣の類であり、諸家の子孫に還す宝物は以前に諸家から齎されたもの＝献上物＝服属の証物と考えて大過ない。子孫へ返却を命じたのは、以前のそうした服属の在り方が変質したこと、あるいは変質することを示唆するものであり、ニイナメ・ヲスクニ儀礼から大嘗祭への変化に対応するものということができよう。再生物部氏＝石上朝臣はこうした時代の動きのなかで新たな氏族の職掌として楯鉾儀礼に関与していったのであり、石上を氏の名としたのであった。

刀剣が服属の証とされたのは刀剣に呪力を認めたからであるが、こうした刀剣の呪力と関わりをもった物部氏は、氏の名の「モノ」にみられるように、ヤマト王権の軍事を担う呪的戦士団として呪的な性格を色濃くもつ氏族であった。例えば『風土記』などにしばしばみられる神々の争いは、現実の集団の闘争が各集団の戴く神の争いとして神話的・説話的に表現されているのであるが、物部氏はまさにそのように表現される肉実を有する氏族であるといえよう。ヤマト王権の全国統一過程における版図の拡大は、一面ではそれまで王権の支配が及ばないか間接的であ

った地域に境界を越えて支配を拡大することである。その異郷を支配する勢力を倒すことは、その勢力の戴く神を支配下に置くことであり、いわば非日常的な「怪なるモノ」のいる異郷に入り、その地の「怪なるモノ」を呪力で調伏し服属させることが必要であった。この点で王権の軍事を分掌する同じ軍事的氏族の大伴氏と相違するところがあったのである。

大伴氏は軍事的伴造としての意識、氏の名にみられるようにトモの意識は律令制下においても色濃くみられる。例えば天平勝宝八(七五六)歳五月に一族の出雲守従四位上大伴宿禰古慈斐が「朝廷を誹謗し、人臣の礼無きに坐せられ<sup>(65)</sup>」た時(『統紀』)、家持は「族に喩す歌」(『万葉集』四四六五番)を詠んで一族に自重を促した。そこには瓊々杵尊の降臨以来大王に奉仕してきた歴史を振り返り「祖の名断つな 大伴の氏と名に負へる 大夫の伴」と結んでいる。こうした大伴的なトモ意識は律令制下奈良時代の再生物部氏には希薄であり、見られないといつてよいのではなからうか。<sup>(66)</sup>

豊国のキクの地に置かれた聞物部は、まさにこうした物部のあり方を典型的に示すものである。その現地管掌者に現地首長を任じる間接的なトモ一べではなく、より直接的な関係こそが、企救郡地方の政治・軍事・交通・外交などの重要性からいってもふさわしいというべきである。その管掌者は現存史料に基づくならば物部君がもっとも相応しく、中央トモの物部連との血縁関係の存在を考慮してもあながち的外れではないと思われる。豊国の物部をめぐるのは、物部君―物部首―物部の秩序が想定されるのである。

なお、聞物部と同様の表記と思われる物部系人物がいま一人知られる。表1にあげた『書紀』欽明十五年十二月条の竹斯物部莫奇委沙奇である。

この人名表記は日本側のものではなく百済系のものであるが、いわゆる「韓子」(継体二十四年九月条)ではなく、また日系百済官人でもない。天皇の派遣した有至臣が「将て来る所の民」であり、「能く火箭を射る」兵士であった。この人物はのちの筑前・筑後を意味する竹斯(筑紫)に居住する物部であるが、聞物部大斧手と同様の歴史的背景をもった人物と考えてよいのではないかと思われる。

## (九)

木簡の出土した長野角屋敷遺跡は豊前国企救郡の域内にあるが、ここは北は関門海峡から響灘・玄界灘に、東は周防灘に面する海上交通の要衝である。畿内政権であるヤマト王権・律令政府にとって九州を統治し、朝鮮・中国と交渉を持つ上で、またそのための畿内との連絡を確保する上からも、いわば「生命線」ともいえる橋頭堡的な重要な地理的位置を占めていた。本州沿いの瀬戸内海航路はいうまでもなく、四国北岸ルートも周防の娑婆の津を経由するか、あるいは国東半島近辺から九州の東海岸沿いに北上するにしても、関門海峡を通過しなければならない<sup>(68)</sup>。また、陸路山陽道は長門から関門海峡を渡り、令制の駅制にも明らかなように社埼駅を経由して大宰府道となって大宰府に至る外、九州各地への陸上交通の分岐点ともなっていた。

豊国の国造として現存史料から知られるのは、豊前では宇佐国造(宇佐公)・豊国造(豊国直)、豊後では大分国造(大分君)・国前国造(国前臣)などであるが、既に触れたように豊前の北を基盤としたと考えられる豊国造を除いては、後代に僅かではあるがその活動が知られる<sup>(69)</sup>。このことは企救郡を中心とする豊前北部の有する地理的、地政学的な要因が与っていたのではないであろうか。大宝令制下では大宰府は他に類



この名残りを止めた表記であったとすれば、郷数の減少による郡の等級の変化に対応するともいえよう。その場合でも郡域の縮小を伴ったものとは考えらず、領域の変動を伴わない郷数の減少であったと考えられる。

しかしながら、既に許された紙数を大幅に超過してしまった。この問題については小稿では保留とし、別途稿を改めて考えてみたいと思う。ただ、この問題は先にも述べたように、ヤマト王権・律令国家にとっての九州支配と不可分の関係をもつものであり、大宰府と豊前国、豊前国と企救郡、板櫃鎮などの鎮、門司などを総合的に検討しなければならないと考えている。

## (一〇)

以上、冗長な論述をつらね、膳臣など論じ残したことも多いが、一先ず擱筆することとしたい。小稿では長野角屋敷遺跡出土木簡に見える大領物部氏の姓（カバネ）が「公」か「臣」という釈読をめぐる問題に、物部集団のなかでの物部公（君）と物部臣についての若干の整理と物部集団と九州の関わりをあわせ考えることによって、両者のいずれにより妥当性があるかを考えてみようとしたものである。その結果は、より「公」に妥当性が認められるということであった。論述も不完全燃焼の嫌いなしとせず、また先行研究や史料の見落としもあるのではないかと恐れるが、諸賢の忌憚のないご批判、ご教示をいただき、さらに考察をすすめることができればと願うものである。

## 註

- (1) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室『長野角屋敷遺跡』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第二三五集、一九九九年）。本遺跡についての以下の記述および木簡実測図は本報告書による。
- (2) 木簡の釈文については註(1)の報告書によったが、『木簡研究』第二〇号（木簡学会、一九九八年）に上長野A遺跡出土木簡として発掘担当者前田義人氏による報告が、また同氏「長野角屋敷遺跡出土の郡召木簡について」（『北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室究紀要』第一三号、一九九九年）があり、参照した。
- (3) 奈良文化財研究所の「木簡データベース」は『木簡研究』第二〇号を出典に「物部臣今継」としている。註(1)の報告書は「三行目の頭に発給者の官位と人名である大領物部臣今継が自署されている」としているが、果たして本文と異筆であって、同筆でないと判断してよいであろうか。習熟しない筆者にとって、一抹の不安が残るのである。例えば正倉院文書などの例では自署は名のみが一般的であることを参考にすれば、この場合も自署は名の部分のみである可能性も考慮される。もしそうだとすれば、物部「臣」の部分は全文同筆の場合と同様に本文と同筆と考えられるが、膳臣と物部「臣」の臣の字は同一人の手になる字であろうか。むしろ文字自体が異なると看做した方がよいように思われるが、いかがであろうか。
- (4) 本学に考古学講義担当の非常勤講師として出講されていた北九州市立考古博物館学芸員の故松永幸男氏の計らいで、二〇〇〇年六月二十四日に実見する機会を得た。なお、木簡の写真は北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室の許しを得て、当日いただいたものを使用した。
- (5) 召文については、鬼頭清明「召文についての二つ問題」（『信濃



- 『三二一九、一九八六年、のち同著『古代木簡の基礎的研究』に再録)を参照。
- (6) 郡符木簡については近年注目されている。鬼頭清明「長岡京木簡にみえる郡符について」(中山修一先生古稀記念事業会編『長岡京古文化論叢』、同朋舎出版、一九八六年、のち同著『古代木簡の基礎的研究』に増補再録)、平川南「郡符木簡―古代地方行政論にむけて」(虎尾俊哉編『律令国家の地方支配』吉川弘文館、一九九五年)などを参照。
- (7) 鬼頭清明、註(5)論文参照。
- (8) 直木孝次郎「税長について」(『人文研究』九一一〇、一九五八年、のち同著『奈良時代史の諸問題』に再録)。
- (9) 『類聚三代格』卷十二(新訂増補 国史大系本)所収の延暦十四年閏七月十五日太政官符及び同年九月十七日太政官符。
- (10) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室編『長野A遺跡2』(北九州市埋蔵文化財調査報告書第五十四集、一九八七年)、同『寺田遺跡』(北九州市埋蔵文化財調査報告書第七〇集、一九八八年)。
- (11) 梅崎恵司「旧豊前国企救郡官衙考」(『研究紀要』第七号、北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室、一九九三年)や山中敏史「館・厨家の構造と機能」(同著『古代地方官衙遺跡の研究』、塙書房、一九九四年)などを参照されたい。
- (12) 近年、大連については、倉本一宏氏が「大化前代の大和王権内に、大連という職位、政治的地位が実在していたとは考えがたく、大連とは、連姓氏族内部において自己の先祖を顕彰するために、七世紀後半以降、連というカバネに美称大を付すことによって造作された敬称に過ぎない」(「氏族合議の成立と展開」『ヒストリア』第一三二号、一

- 九九一年、のち同著『日本古代国家成立の政権構造』に再録)との説を提示されているが、根拠とされた史料など、なお慎重な検討が必要であり、直ちには従えない。
- (13) 拙稿「石上神宮と忍坂大中姫」(『日本書紀研究』第十三冊、塙書房、一九八五年)。
- (14) 拙稿「祭祀服属儀礼と物部氏」(直木孝次郎先生古稀記念会編『古代史論集』上、塙書房、一九八八年)。
- (15) 佐伯有清『新撰姓氏録の研究 本文篇』(吉川弘文館、一九六二年)による。
- (16) 直木孝次郎「複姓の研究」(同著『日本古代国家の構造』、青木書店、一九五八年)。
- (17) 直木、註(16)論文。
- (18) 『日本書紀』は日本古典文学大系本(岩波書店)、『続日本紀』は新日本古典文学大系本(岩波書店)、『三代実録』は国史大系本(吉川弘文館)による。
- (19) 『先代旧事本紀』は早くから偽書といわれ問題の多い書である。研究史については、鎌田純一『先代旧事本紀の研究 研究の部』(吉川弘文館、一九六二年)、阿部武彦「先代旧事本紀」(坂本太郎・黒板昌夫編『国史大系書目解題』上巻、吉川弘文館、一九七一年)が参考となる。筆者も同書巻五の天孫本紀について初歩的な整理を行ったことがある(「先代旧事本紀天孫本紀攷序説(一)」、『福岡教育大学紀要』第三十九号第二分冊、一九九〇年)。なお、本文については鎌田純一『先代旧事本紀の研究 校本の部』(吉川弘文館、一九六〇年)を使用した。
- (20) 二田物部・当麻物部・芹田物部・鳥見物部・横田物部・嶋戸物部・

浮田物部・巷宜物部・足田物部・須尺物部・田尻物部・赤間物部・久米物部・狭竹物部・大豆物部・肩野物部・羽束物部・尋津物部・布都留物部・経述物部・讃岐三野物部・相模物部・筑紫聞・播磨物部・筑紫贄田物部の名がみえる。栗田寛『栗里先生雑著 中』（吉川半七、一九〇一年）の「物部氏纂記」（巻六）を参照されたい。

(21) 例えば、首については豊前国仲津・上毛郡（大宝二年、戸籍）、出雲国出雲郡（天平十一年、大税賑給歴名帳）、摂津国嶋上郡（主帳、天平勝宝八年、水無瀬絵図奥書）に、直については武蔵国人間郡（神護景雲二年、統紀）に、宿称としては近江国（宝亀元年、統紀）に、君については上野国群馬郡（神亀三年、高田里結知識碑）などに分布がみえる。造は複姓ではあるが既述の物部二田造塩（大化五年、書紀）が知られる。なお、連姓氏族については天武十三年十一月に八色の姓の朝臣を与えられ物部朝臣となったが、朝臣姓は間もなく石上朝臣に氏名を改めた。これ以後の物部連氏にはこのとき朝臣姓の賜与対象とならなかった物部連と後の改氏姓で新たに物部連を与えられた氏族が混在していると思われる。

(22) 拙稿、註(13)論文。

(23) 風土記は日本古典文学大系本（岩波書店）による。

(24) 郡司の定員や連任については、『統紀』天平十一年五月甲寅条の減員の詔や『類聚三代格』弘仁五年三月二十九日太政官符（所引の天平七年五月二十一日格）の同姓補任のことがあるが、風土記の既述はいずれもこれらに抵触しない。この点については田中卓「出雲国風土記の成立」（『出雲国風土記の研究』、出雲大社、一九五三年、のち『田中卓著作集 8』に再録）を参照されたい。

(25) 高善を氏名とする人物に高善君足（天平勝宝二年八月、『大日本

古文書』二十五）と高善公（君）万呂（「充厨子彩色帳」、天平勝宝四年潤三月、『大日本古文書』三・十二）が知られる。

(26) 『寧楽遺文』上巻（東京堂出版）、『大日本古文書』二、および『正倉院古文書影印集成』二（八木書店、一九九〇年）による。出雲の豪族の整理については、森公章「出雲地域とヤマト王権」（稲田高司・八木充編『新版古代の日本 4 中国・四国』、角川書店、一九九二年）や水野祐「出雲の豪族と出雲臣族」（上田正昭編『古代を考える 出雲』、吉川弘文館、一九九三年）などが参考となる。

(27) 『姓氏録』（左京神別下）に「矢田部連 伊香我色乎命之後也」とあるように物部系の氏族であり、天武十二年に連に改姓。

(28) ヤマト王権への服属の証としての神宝類を保管する石上神宮と十千根を介して結びついている。このことは『書紀』垂仁三十九年・八十七年条にみられる五十瓊敷命に与えられた十箇品部とも関わることになるが、その一つが楯部である。物部臣が楯縫郡の主帳という有力氏族であることは、楯部と無関係といえるであろうか。この一連の説話については、註(13)の拙稿を参照いただきたい。

(29) 出雲地方と北部九州の関係については考古学では梅原未治氏をはじめ早くから論じられてきたが（山本清編『風土記の考古学 3 出雲国風土記の巻』、同成社、一九九五年、などを参照）、『書紀』崇神六十年七月条の武諸隅が出雲の神宝の献上を求めて出雲に派遣された時、神宝を掌る出雲臣の遠祖出雲振根は筑紫国に行っていて不在であったという伝えは、説話とはいえ、両地域の繋がりを反映したものである。しかし、このことが出雲臣の筑紫進出、当該木簡の物部「臣」を証左するものでないことはいうまでもないと思われる。

(30) 小倉慈司氏によれば、本逸文は今日では伴信友の『古本風土記逸

文』によってしか知りえず、それは岡部春平が天保七（一八三六）年  
十十年の間に、白河郡八槻村の都々古別神社の修験大善院に伝わる冊  
子記載の文を信友に写し送ったものによるものであり、慶長二（一五  
九七）年の陸奥国一宮近津大明神縁起よりもより素朴な形を伝えてい  
るところから、この逸文を載せた元の書は少なくともそれ以前の成立  
と見做してよいと思われる、といわれる（「古本風土記逸文所収陸奥  
国風土記逸文について」『市史研究あおもり』二号、一九九九年）。

(31) 『記・紀』の履中・清寧天皇の巻では、履中の皇女で市辺押羽皇  
子の妹を忍海郎女・蒼海皇女といい、その別名を飯豊皇女（郎女・王  
）とする。その一方で顕宗紀は市辺押羽皇子の女で顕宗・仁賢の姉を  
飯豊女王・飯豊青皇女・忍海飯豊青尊で別名を忍海部女王という。

(32) 『神道大辞典』（平凡社、一九三七年、のち臨川書店より復刻版  
刊行）によれば豊宇賀賣の転かとする。『神楽歌』には「幣は 我が  
にはあらず、天に坐す 豊岡姫（止与遠加比女）の宮の幣 宮の幣」  
（採物・幣）をはじめ、杖・篠・杵・薦枕などでも豊岡姫が歌われて  
いる（白田甚五郎校注・訳、『新編日本古典文学全集』四二、小学館、  
二〇〇〇年）。豊岡姫の同定についてはいくつかの説があるが、その  
基本的性格は豊作を祈り食物を主宰する「ミケツカミ（御食津神・御  
饌都神）」と考えてよいのではなかろうか。

(33) 飯豊はその表記に拘わらず、『和名抄』は「以比止与」を鴈鶯  
（フクロウ）、『新撰字鏡』は「伊比止与、又与太加」を鵠としている  
ように、鳥の名に由来するのであろう。仁徳天皇のオオサザキのサザ  
キが『書紀』仁徳元年正月条に伝えるように鳥の名「鴈鶯」（みそさ  
ざい）に因むものであることも参考になる。なお、両書については京  
都大学国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄』本文篇（一九八

七年版、臨川書店）、同編『新撰字鏡』（増訂版、一九八七年版、臨川  
書店）による。

(34) 『和名抄』も「飯豊」とするのは刊本であって、高山寺本は「餘  
豊」で「以比止与」と訓じている。

(35) 陸奥に関わる複姓氏族に物部匠瑛連（宿祢）がいる。『後紀』弘  
仁二（八一）年三月に外従五位下の足継が鎮守副將軍、翌年二月に  
は鎮守將軍としてみえ、『統後紀』承和元（八三四）年には熊猪が外  
従五位下に昇叙し鎮守將軍に就いている。承和二年三月辛酉条は物部  
匠瑛連熊猪への宿祢賜姓と京への貫附とともに、自らの出自を「昔物  
部小事大連錫節天朝、出征坂東、凱歌帰報、藉此功勲、令得於下総国、  
始建匠瑛郡、仍以為氏、是則熊猪等祖也」と主張している。彼らはそ  
の複姓の匠瑛からも知られるように下総国人であり、職掌としての関  
わりとみられる。ここにみえる物部小事大連は『先代旧事本紀』（卷  
五・天孫本紀）に十二世孫物部木連子連公（仁賢朝の大連）の弟（志  
陀連・柴垣連・田井連等祖）と伝えられる人物である。『統後紀』に  
このような祖先伝承を主張しながら、「天孫本紀」の後裔氏族にその  
名をみないことは、「天孫本紀」の成立やこの時期の東国・陸奥の複  
姓物部氏族と既述の再生＝後期物部（石上）朝臣との関係を考える時  
に注意すべきものであろう。なお、陸奥国には延喜式内社の物部神社  
あるいは石上神社はみえず、物部郷・石上郷も『和名抄』には記載が  
ない。

(36) 西宮秀紀氏はこの風土記逸文について、飯豊青尊＝顕宗天皇の姉  
飯豊青皇女で、逸文の「伝承が史実か否かは確かめがたいが、天皇（  
准天皇）が山（の神）に捧げたものを「御幣」と称しているのであろ  
う」といわれる。（「日本古代社会に於ける幣帛の成立」、菊地康明

- 編『律令制祭祀論考』、塙書房、一九九一年、のち同氏著『律令国家と神祇祭祀制度の研究』に再録。
- (37) 『類聚三代格』巻一（応聴奉諸神社幣帛使出入陸奥国関事）。なお、同文は『三代実録』貞観八年正月二十日条にみえる。鹿嶋神宮司解が引用する称宜外正六位上中臣部道継解には、古老の伝を引きつつ、延暦以来大神の封物を幣帛料として苗裔神三十八社の諸神に奉っていたが、弘仁以来中断し、諸神の祟りが起こった。そこで嘉祥元年に再開したが、陸奥国は旧例がないとして関の通過を認めなかった。このため道継は関下に留まり諸社に行くことができず、幣物を河頭に廃棄し空しく戻るほかはなかった、とある。
- (38) 本条に関連する記事が物部守屋滅亡を伝える崇峻即位前紀の記述中に「時人相謂曰、蘇我大臣之妻、是物部守屋大連之妹也。大臣妄用妻計、而殺大連矣」とみえている。これらの記事については、拙稿「大和川と物部氏」（横田健一編『日本書紀研究』第九冊、塙書房、一九七六年）を参照されたい。
- (39) 守屋の妹については、『旧事紀』や「紀氏家牒」・「神主布留宿称系譜」などの史料に記事があるが、いまは触れないでおく。
- (40) 天平宝字元年三月二十七日の勅によって藤原部を久須波良部に、君子部を吉美侯部に改めた（『統紀』）のと同根である。正倉院文書などには公子部の表記もみられる。
- (41) 東野治之「上野三碑管見」（『群馬県史研究』第二三号、一九八一年、のち同著『日本古代木簡の研究』に増補再録）。
- (42) 金井沢碑についての問題点や研究史等については、勝浦令子「金井沢碑を読む」（あたらしい古代史の会編『東国石文の古代史』、吉川弘文館、一九九九年）を参照。

- (43) 筑後国神名帳は高良大社文書として伝えられている。小稿では小郡市史編集委員会編『小郡市史』第四巻・資料編・原始・古代（小郡市、二〇〇一年）によった。
- (44) コウラの地名については、『肥前国風土記』に景行天皇の巡狩時に筑紫国御井郡の高羅行宮に御した（基肄郡条）とある高羅行宮や高羅山（同郡曰里郷条）が知られる。
- (45) 高良神社の成立については、十四世紀前半の成立かといわれる八幡系の『高良玉垂宮縁起』は仲哀天皇・神功皇后の事蹟に付会し、康治三（一一四四）初見の高隆寺は高良社の神宮寺であるが、建保七（一二一九）年頃までの成立とみられる『高良大菩薩御託宣文并高隆寺縁起』は、天武朝の堂塔造営を伝えている。その他、正保三（一六四六）年に書名が初見する『高良玉垂宮神秘書（高良記）』は、戦国末・近世初めの成立かとみられているが、いずれも記事内容についてはさらなる検討が必要である。こうした縁起類とは別に、高良神社の存在を確かに示す初見は『日本紀略』延暦十四（七九五）年五月壬申条の「筑後国高良神に従五位下を授け奉る」とする神階授与の記事であり、『延喜式』神名帳の高良玉垂命神社の記載である。
- 波多野院三氏は高隆寺の創建を天平勝宝年間以後と考えられ、後述の高良神の五姓氏人に大和系の物部・丹波・草部らが加わるのは六世紀から七世紀にかけてのことであろう、といわれる（高良玉垂神社の成立、同著『筑紫史論』第二輯、三光社出版、一九七四年）。これらの縁起や高良神社については、太田亮『高良山史』（神道史学会、一九六二年）、川添昭二・山中耕作他編『高良玉垂宮神秘書・同紙背』（高良大社、一九七二年）、久留米市史編さん委員会編『久留米市史』第一巻（久留米市、一九八一年）、同『久留米市史』第七巻（一



九九二年)を参考にした。

- (46) 註(45)の『久留米市史』第七卷による。『高良玉垂宮神秘書』は物部に代わり草賀部をあげるが、「一、高良大菩薩御氏 物部御同性大祝職ナリ」「一、大菩薩御記文曰 五姓ヲ定ムルコト、物部ヲ為秘センカ也」と記す。
- (47) この他、斉衡三(八五六)年六月十九日付文書(『高隆寺縁起』)に「把笏高良玉垂名神祝外少初位下物部大継事」とみえ、康永四(一三四五)年十月二十八日付畠地讓状(『神秘書』紙背文書)には物部安延(花押)・物部安隆の名がみえている外に、既述の縁起類には大臣物部大連の名もみえている。なお、前者の文書は把笏についてのものであるが、これは斉衡三年四月甲戌に「詔して、諸国三位已上名神の神主及び祢宜・祝ら、並びに把笏に預からしむ」(『文徳実録』)とあるのに対応し矛盾しない。
- (48) 祝(ハフリ)についての基礎的な考察に西宮秀紀「神祇官成立の一側面―祝・祝部を中心に―」(『続日本紀研究』第三〇〇号、一九九六年、のち註(36)著書に「祝・祝部に関する基礎的考察」と改題して再録)がある。
- (49) 註(45)の『高良山史』第二章や『久留米市史』第一巻の「高良大社の祭神」を参照されたい。
- (50) 註(45)『久留米市史』第一巻・第二編第二章第六節。なお、五姓氏人の「公」は、先に本文で触れたようにカバネとみるのが妥当であろう。草部が水沼君系であっても、日下部系であっても、後者にも日下部君の系統があることから、草部の「公」はカバネとみる余地がある。
- (51) 太田亮氏は、「当(筑後)国は物部族最初の根拠地にして、当地

方の大社高良山は其の宗祀と考へらる」(『姓氏家系大辞典』第三卷、モノノへの項54、角川書店、一九六三年)とも、また「筑後平野こそ、物部氏の原住地ではないかと想像されよう」「投馬国とは物部氏の故国であつて、高良神社は物部氏の氏神なると共に、投馬国の宗社たりし如く考へられる」(註45『高良山史』第三章)といわれるが、従えない。この太田説については、波多野院三「高良山史を読んで」(註45の著書、一九六四年執筆)が早く批判を加えている。

(52) 『記』は日子刺肩別命の母を意富夜麻登玖迹阿礼比売命とし、夜麻登母々曾昆亮命・比古伊佐勢理昆古命(亦名、大吾備津日子命)・倭飛羽矢若屋比売と兄弟とするが、『紀』孝靈二年条には母を倭国香媛とし、その子らは『記』の三人と対応するが、日子刺肩別命の名はみえない。その点でこの命は系譜上で孤立しているといえる。

(53) 吉田晶氏は「国造本紀における国造名」(『続日本紀研究』第一五五・一五六合併号、一九七一年、のち増補して同著『日本古代国家成立史論』に再録)において、「国造本紀」記載の国造は、原則として六世紀中葉以降、七世紀後半までの期間に実在した国造であつたと考えられる、といわれる。なお、豊国国造については「天孫本紀」の尾張氏纂記には十世孫大原足尼を「筑紫豊国々造等祖」としている。

(54) 新川登亀男氏は、豊国秋山らについて、本貫は企救郡であつた可能性は高く、彼等の結合体は現存の郡司を中核とするものとは異なるのもであつたらしく、八世紀前半、さらにいえば七世紀後半に遡っても豊国をウジ名とする氏族が豊前国全体に居住生活し、伝統的な勢力を及ぼしていたことは、けっして認めることはできない、といわれる(「豊国氏の歴史と文化」、同氏編『西海と南島の生活・文化 古代王権と交流8』、名著出版、一九九五年)。

(55) 筆者は以前に小稿に関連する「物部氏の興亡と北部九州」(『東アジアの古代文化』一一一号、大和書房、二〇〇二年)で、「他にみえない物部君は畿内豪族ではなく九州の地方豪族とみるのが順当であろう」と述べたが、本稿のように訂正しておきたいと思う。

(56) 筑紫君磐井の「反乱」については既に述べたことがあるので、本稿では深くは立ち入らないこととする。拙稿「磐井の乱の前後」(『新版 古代の日本 3九州・沖縄』、角川書店、一九九一年)を参照していただければ幸いである。なお、物部と北部九州の関係は、磐井の「反乱」後に始まるものではない。いわゆる第二次ヤマト王権の時期＝五世紀代の少なくとも後半頃以降からは、点と線のレベルであったとしても、王権と九州勢力との関わりの中である程度関係の存在は認めてよいのではないかと思われるが、いかがであろうか。

(57) 『書紀』には「反乱」の契機を新羅に滅ぼされた南加羅などの復興のために派遣した近江毛野軍を新羅から賄賂を受けた磐井が阻止したことにあるとしているが、南加羅復興のための近江毛野をめぐる話は、磐井の「反乱」とは本来別個のものであったのを『書紀』編者が関連付けて一つに纏めたものであろう。

(58) この物部連鹿鹿火の言葉が『書紀』の編者による『芸文類聚』の引用に基づくことは、小島憲之『上代日本文学と中国文学 上』(塙書房、一九六二年)に指摘されている。また、岩波本『日本書紀 下』の当該部分の頭注を参照されたい。なお、『書紀』宣化元年五月条の那津官家をめぐる記事に、天皇以下ヤマト王権の支配層が各地の屯倉から穀を運ばせたと伝え、物部大連鹿鹿火も新家連をして新家屯倉の穀を運ばせているが、大伴氏の姿がみえないことは注目される。

(59) 拙稿「大宰府覚書―筑紫大宰の成立」(『福岡教育大学紀要』第

五十三号第二分冊、二〇〇四年)及び大宰府市史編集委員会編『大宰府市史 古代資料編』(大宰府市、一九九八年)・同『大宰府市史 通史編1』(二〇〇五年)の筆者執筆の該当箇所を参照いただきたい。

(60) 伊勢朝日郎の討伐譚について河野勝行氏は、朝日郎(アサケノイラツコ)の名の天智・天武朝頃の造作の可能性を認めつつも、伝承の事実性の大要は信じてよく、朝明郡に勢力を張った豪族を主力とした反乱で、物部氏に伝えられた伝承であろうといわれる(「五十六世紀における伊勢」、大阪歴史学会編『古代国家の形成と展開』、吉川弘文館、一九七六年、のち同著『古代天皇制への接近』に再録)。また、朝日郎をアサカ郎と訓むべきで、その勢力は壹志郡に拠ったものとする久志本鉄也「雄略紀伊勢朝日郎の乱小考」(『立命館文学』第五一九号、一九九〇年)がある。なお、『延喜式』(巻九、神名上)では伊勢国の飯高郡と壹志郡に物部神社がみえている。

(61) 例えば、『旧事紀』巻五の天孫本紀の物部氏系譜では、十一世孫目大連(清寧朝)、十三世孫目連(継体朝)、十五世孫目連(欽明朝)に三名が同名異人として取り込まれている(拙稿、註19論文)。

(62) 榎村寛之「物部の楯を巡って」(横田健一編『日本書紀研究』第十七冊、塙書房、一九九〇年、のち同著『律令天皇制祭祀の研究』に再録)。

(63) 岡田精司「大化前代の服属儀礼と新嘗」(『日本史研究』第六〇号・第六一号、一九六二年、のち同著『古代王権の祭祀と神話』に再録)。

(64) 拙稿、註(13)論文。

(65) 聖武天皇崩御の八日後に起こったこの事件の真相は不明。『続紀』は古慈斐とともに淡海三船も処罰されたとするが、『萬葉集』の左

注では三船の讒言によって古慈斐は出雲守を解任されたとしている。

(66) 大伴宿禰が石上朝臣や榎井連のように儀礼において楯や鉾の樹立に関与した例が若干みられる。文武二(六九八)年十一月己卯の大嘗祭では榎井朝臣倭麻呂が大楯を、大伴宿禰手拍が楯杵を竖ており、また難波より遷幸した聖武天皇は天平十六(七四四)年正月元旦に紫香樂宮で大伴宿禰生養と佐伯宿禰常人をして大楯と槍を樹てさせている。『統紀』は後者について「石上・榎井二氏、倉卒にして追し集むるに及ばず」と注記して、大伴・佐伯の行動が臨時のものであったことを強調している。生養が兵部卿、常人が衛門督であったことと無関係ではなからうが、軍事的な天皇近侍氏族トモの伝統も与かっていたであろう。

(67) いわゆる日系百濟官人については、笠井倭人「欽明朝における百濟の対倭外交」(三品彰英編『日本書紀研究』第一冊、塙書房、一九六四年、のち同著『古代の日朝関係と日本書紀』に再録)を参照されたい。

(68) こうした点は、延暦十五(七九六)年十一月二十一日付太政官符「応聽自草野国埼坂門等津往還公私之船事」(『類聚三代格』卷十六)に引く太宰府解に載せる天平十八(七四六)七月の官符には「官人・百姓・商旅の徒が豊前国草野津・豊後国国埼・坂門等の津から意に任せて往還し擅に国物を漕ぶことを禁止する」とあり、府は「上件之三津、尚、奸徒多く、旧来の越度禁断することができない。亦、過所があっても豊前門司を勘過を受けない徒が多い」として官裁を請うていることにも反映している。草野津は行橋市草野付近、国埼津は大分県国東町近、坂門津は同県佐賀関町辺に比定される。また、斉明天皇の筑前朝倉宮も周防灘―難波を考慮して設定されたと思われる。

(69) 大分君恵尺や稚身などは壬申の乱の功臣として知られる。

(70) 『書紀』天智六(六六七)年十一月条に筑紫太宰府を指して筑紫都督府の表記がある。これは『書紀』編者の潤色であったとしても、そうした認識が中央官人であったのであり、磐井の「反乱」に際しての物部麿鹿火に対する継体天皇の言葉「長門以東朕制之、筑紫以西汝制之。専行賞罰、勿煩頻奏」(継体二十一年八月条)と相通するものである。

(71) 吉田東伍『増補大日本地名辞書』第四卷(豊前国企救郡の項、富山房、一九七一年)。

(72) 『古律書残篇』については、「本書の国郡部の主体の年代は、養老五(七二二)年四月、天平九(七三七)年十二月の間と結論されよう」という坂本太郎氏の説(「律書残篇の一考察」『史学雑誌』第四十五卷第十一号、一九三四年、のち『坂本太郎著作集』第七卷に再録)に基本的には従ってよい。氏の頃には郷里制の議論は提起されていなかったが、今日の郷里制の理解に基づき靈龜三(養老元)年、天平十二年を考慮すべきかと思われる。なお、『残篇』は古典保存会のコロタイプ複製版(一九三四年)と東野治之「『古律書残篇』試訓」(『南都仏教』第四十六号、一九八一年)を参考にした。

(73) 『和名抄』の郷名については、一般に池邊彌氏の説(『和名類聚抄郡郷里駅名考證』、吉川弘文館、一九八一年)によって、九世紀中期頃を中心とする時期の状況を表しているというように考えられている。これに対して坂上康俊氏は、貞観式の編纂・施行時の際に一旦まとめられた郡名一覧が、和名抄国郡部編纂の際の基本資料となり、貞観以降の郡の分立を書き込んでいく手順をたどった源順の手許に、それよりずっと古い九世紀前半の郷名しか用意していなかったと考える

のはやや無理があるように思われる（「奈良平安時代人口データの再検討」『日本史研究』第五三六号、二〇〇七年）、といわれる。

(74) 『延喜式』は延長五（九二七）年完成、康保四（九六七）年施行であり、『和名抄』は承平年間（九三二―三三）の成立である。

(75) 坂上氏は註(73)論文で、律書残篇の郷数を風土記と対照すると、律書残篇には余戸も駅家郷も含まれておらず、神戸もかなりの程度含まれていない、といわれる。また、「奈良時代前期の五十戸一郷の正規郷を数え上げた律書残篇の四〇一二郷」といわれるように、律書残篇の郡郷里数以下の統計的データを奈良時代前半のものとして利用可能とされる。